

# ●一般演題 I 「排尿障害・他」

座長：滋賀医科大学泌尿器科学講座 岡田 裕作

## 1. 地黄丸類が有効であった 前立腺肥大症患者の臨床的検討

倉敷成人病センター 泌尿器科  
○石戸 則孝、岸本 涼、野崎 邦浩  
山本 康雄、高本 均

【緒言】 $\alpha 1$  ブロッカーの登場で、前立腺肥大症の内服治療は大きく変化した。その有用性にもかかわらず、漢方薬が勝る症例がある。漢方薬（地黄丸類）が有効であった症例の背景因子に関し retrospective study を行った。

【対象と方法】1992年7月より2007年9月までに、前立腺肥大症4487例に対し、延べ59734処方を行った。処方内容により症例を地黄丸類の漢方薬（八味地黄丸、牛車腎気丸、六味丸）投与群、 $\alpha 1$  ブロッカー（ハルナール、フリバス、ユリーフ、ハルスロー、ハルナールD）投与群、その他の薬剤（エビプロスタット、パラプロスト、プロスタールL、パーセリン）投与群の3群に分けて検討した。 $\alpha 1$  ブロッカーまたはその他の薬剤が無効なため地黄丸類に変更あるいは地黄丸類を追加した症例、または $\alpha 1$  ブロッカーまたはその他の薬剤との併用から地黄丸類の単剤へ減じた症例のうち、地黄丸類の処方が複数回あり、以後、地黄丸類以外の処方に変更されなかった症例を対象とした。処方の選択は主治医に委ね、患者の希望により処方を変更した。東洋医学専門医は演者1名である。

【結果】50歳以上で、地黄丸類を投与したのは124例であった。年齢は50歳～95歳（平均71.3歳）であった。

【考察】地黄丸類を選択した条件や時期、さらに前立腺、排尿に関するパラメーターについて検討を加えたい。

## 2. $\alpha 1$ 遮断剤、抗コリン剤等で効果不十分であった 高齢者夜間頻尿に対する酸棗仁湯(TJ-103)の検討

日産厚生会玉川病院 泌尿器科<sup>1)</sup>  
帝京大学溝口病院 泌尿器科<sup>2)</sup>  
東邦大学医学部 泌尿器科<sup>3)</sup>

○鈴木 九里<sup>1)</sup>、五十嵐 一真<sup>1)</sup>、関根 英明<sup>1)2)</sup>、石井 延久<sup>3)</sup>

高齢者の場合、夜間頻尿を訴える患者が非常に多く、泌尿器科医はその対策に苦慮しているのが実情である。酸棗仁湯（TJ-103）は、酸棗仁を中心に茯苓、川芎、知母、甘草を配合した生薬で、体力が低下し、心身ともに疲労して不眠を訴える患者に用いる。今回、 $\alpha 1$  遮断剤、抗コリン剤等で効果が不十分であった夜間頻尿の高齢患者に対して酸棗仁湯を投与し、その効果を検討した。

対象は $\alpha 1$  遮断剤、抗コリン剤等の効果が不十分で不満を訴えていた夜間頻尿の高齢患者21名で、男性13名（平均年齢73.5歳、62～89歳）、女性8名（平均年齢76.3歳、64～84歳）である。初診から酸棗仁湯投与開始までの期間は比較的長く、男性では平均22.1ヶ月（1～52ヶ月）、女性では平均14.6ヶ月（1～46ヶ月）であった。評価方法は、男性では国際前立腺症状スコア（I-PSS）およびQOL（Quality of Life）スコアを、女性では過活動膀胱症状質問票（OABSS: Overactive Bladder Symptom Score）およびQOLスコアを用いて行った。

結果は、男性では、酸棗仁湯投与前後でI-PSS合計の平均スコアは14.9（s=7.5）→14.8（s=8.5）、QOLの平均スコアは4.1（s=1.0）→2.8（s=1.0）であった。女性ではOABSS合計の平均は8.0（s=5.5）→7.5（s=5.5）、QOLは4.8（s=1.0）→3.8（s=1.7）であった。男女ともQOLの改善傾向がみられた。

夜間頻尿は患者のQOLを著しく損なうものである。従来、夜間頻尿には $\alpha 1$  遮断剤、抗コリン剤、三環系抗鬱剤等が用いられてきたが、必ずしも全ての患者に有効とは限らない。今回、酸棗仁湯でQOLの改善傾向を認め、この様な患者への対応の一手段として有効であると思われた。